
盲目の天使

倅希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盲目の天使

【Nコード】

N0171A

【作者名】

倅希

【あらすじ】

あらすじ現在準備中

もし、貴方の目の前に道に迷った盲目の天使が居たとしたら。

貴方はどうしますか？

手を差し伸べますか？

そのまま黙って見ていますか？

それとも・・・・・・・・・・・・・・・・騙し、籠に入れて閉じこめて
しますか？

1、天使の望み

触れようとしたら消えてしまつて、
触れようとするのを止めたら、現れる。

これは、何だ？

「おい・・・お前は・・・」

そこまで言つて口をつぐむ。

ああ・・・これは言うべきではなかった言葉だ。

幻覚でもなく、

幽霊でもなく、

ソレは大きく真っ白の羽を広げていた。

「天使・・・」

殆ど口の中で響いただけの呟きは、ソレにも、静かな周りにも聞こえていない。

ただ、ソレには聞こえていなかった声は、聞こえずとも表情で見えて取れたらしく、

ソレはふわりと笑った。

（綺麗・・・）

自分がそう思ってしまったことに少し驚いて、同時に恥ずかしく思った。

本来自分は、幻や幽霊の類・・・すなわち科学では解明できないものは信じない質だ。

でも、信じずにはいらなかった。

「天使・・・なのか・・・？」

まだハッキリ口から出ない言葉は今度はソレにも聞こえたらしく、

「はい。」

と小さな返事をした。

笑っているのだが、その顔は笑っていると言うよりも、切なく苦しそうな顔だった。

「なんでこんなとこにいるんだよ？」

何か眼を合わせづらく、そらしながら言ってしまう。

「彼に逢うためです。」

ハッキリと答える。

「死んだのか？」

眼はそらしたまま、そう聞くと、その天使はなににも言わない。

天使の方を見ると、天使は哀しそうな顔で、こくりと頷いた。

どうやら、この話題は避けた方が良さらしい。

とりあえず、他のことを聞くことにする。

「名前は」

「蘭です。」

花の名前だ。

「綺麗な名前だな」

「彼もそう言っていました」

あ・・・また俺はまずいことを・・・

そう思ったが、彼女は意外に優しい顔をしている。

「年は・・・って天使なんだから関係ないか・・・」

「いえ。死んだのは十九の誕生日でそれからいま、一ヶ月が経過しています。」

「そ・・・そうなのか・・・」

天使が明確に答えるので、ちょっと驚いた。

十九って言うって俺より一つ下だ。

って・・・そんなことは良いとして、また死を思い出させてしまったことに後悔した。

「私は・・・銃で撃たれて死にました。」

「・・・殺されたのか？」

「はい。」

いきなり死んだときの事を言われて驚いたが、殺人だと知ると真相が気になった。

「誰に殺されたんだ？」

「言えません。」

「だ．．．だけど．．．言ったら捕まえられるのに．．．」

「証拠がないので．．．無理ですよ．．．」

「あ．．．ごめん」

「いえ．．．犯人を捕まえようとしてくれているんですね．．．有り難うございます。でも．．．相手は危険な奴らですから．．．」

考えなしに俺はしゃべっていたことに気付き謝ったが彼女はすんなり許してくれた。

「あの．．．」

「ん？」

ちよつと罪悪感に浸っていたのだが、彼女の声に、ふとそつちを見た。

「もうすぐ私．．．目が見えなくなるんです．．．」

「え？」

突然の告白に意味がよく理解できない。

「目が見えなくなるんです。ここに来るための代価が．．．」

「視力だったのか？」

「ええ・・・でも目が見えないと彼に会いに行くことが出来ないから・・・」

「差詰め、呪縛霊だな。」

「はい・・・だから、もし良ければ彼をここに連れてきてくれませんか？」

「は・・・」

「だめですか？」

「・・・いいけど・・・」

困った顔でこつちを見る彼女が可愛くて、OKしてしまったことに少し後悔する。
今日は後悔しっぱなしだ。

「だけどさ・・・そいつが何処にいたなんて分からないし・・・」

そう、そいつを捜すのに時間がかかるはずだ。

「あ・・・それは大丈夫です。貴方も知っていると思いますよ。
彼の名前は・・・工藤新一です。」

「工藤新一って、あの工藤新一か?!」

工藤新一と言えば、日本警察の救世主とまでいわれている迷宮なしの名探偵で、
今や、そこら辺のアイドルより顔を知られている。

ルックスよしで、中学校の頃は、サッカー部のエースと、運動神経もよく、ファンが多い。

「まさか、妄想で彼女・・・なんて事ないよな？」

「そんなことないですよ！！・・・彼は私の大切な人です。」

愛おしそつに言う彼女の目はどこか遠くを見ていた。

「でも、どうするんだ？彼女が天使になって来たって言うのか？絶対信じてくれないぞ。」

「あ・・・」

どうやら彼女は考えなしに言っていたらしい。
でも、突然微笑んだ。

「大丈夫です。彼は信じてくれます。」

よほどその彼のことを信じているらしい。

「わかったよ・・・俺の負けだ。お前の彼を捜してやる。つってもすぐ見つかるだろうけど。」

「お願いします。あっつ貴方のお名前は？」

「ん、俺？」

そんな名乗るような名前じゃないし、

あまり彼女と関わりたくないと思ったが、
名前を先に聞いてしまった手前、とりあえず名乗っておくべきだろ
う。

「俺の名前は俊一だ。」

1（後書き）

倅「蘭ちゃんが死んじゃったあゝ（泣）」

新「お前だろ！ていうかどうしてくれるんだ俺の蘭を！！」

倅「いつ君のモノになったの？」

俊「次回！蘭が居なくなつてぼろぼろになった新一登場！こんな小説だけでも見て下さい！」

新「俺の蘭を呼び捨てにするなあゝ！！」

倅「ああ・・・新一がおかしく・・・」

俊「お前のせいだ。」

2、探され人

2、探され人

「くそっつ」

思いっきりパソコンの電源ボタンを押す。
数秒後にパソコンの電源は落ちた。

がたつと椅子から立ち上がって、そばに置いていたアイスコーヒーを一気に飲む。

仕事がかどらない。

グラスのコーヒーはなくなってしまった。

「志保、悪い。コーヒーを。」

「また強制終了したの？パソコン壊れるわよ。」

グラスにコーヒーを注いだ志保は、パソコンのスイッチを入れた。
こちらからは陰になっていて、表情が見えない。

「なあ、志保。俺はどうして記憶を無くしたんだ？」

ずっと気になっていたこと。

俺は一ヶ月前に記憶を無くした。

今覚えている限りでは、俺は誰かのためにどこかに向かっていたらしい。

でも、それが誰で何処か分からない。

「知らなくて良い事よ。」

パソコンが、薄い光を発した。

パスワード入力画面になっている。

志保は、俺が目覚めたときに手を握っていた人物。

全然覚えていなかったけど、志保は俺の彼女らしい。

しかし、そう言うそぶりは欠片も見せていない。

いつも何処か、焦りのような、気分の悪そうな顔をしている。

大丈夫か？と声を掛けても、ええと小さく答えるだけだ。

本当に、彼女だったのだろうか？

「パスワード、入れるわよ。」

「ああ」

志保はパソコンや科学関係のことについて詳しい。

パソコンはまだ良いとして、科学関係に異様に詳しいのには疑問を持ち、聞いてみたのだが、それも教えてくれなかった。

「早く記憶を取り戻したい・・・」

「記憶なんか無かったって今のままで良いのよ。」

すかさず志保は言う。本当に志保が正しいか分からなかったけど、

今はただ、意見としてそれを受け入れることしかできなかった。

（どうしようか・・・）

自分の中で呟いても誰も返事をするはずがなく、
はぁ・・・と溜息をつくしかなかった。

そもそも蘭がついてくれば工藤新一に証明できるモノの、蘭は目が見えない。

蘭に言わせれば、霊とは違って天使は実体があるので、
目が見えない蘭が空中を浮遊すると、気付かず誰かにぶつかる可能性があるのだ。

姿自体は、霊感の強い人間と、天使が決めた人にしか見えないのだから、

高い位置を飛んでいればいいのだが・・・

目が見えないので、どっちに行つて良いか分からないだろう。

それに、逢えても声を聞くことしかできないのだから皮肉である。

作戦を立てよう。

蘭を信じてもらえるような・・・スゴく難しいが・・・

工藤新一は探偵だ。ということは、死んだ蘭が呼んでいるといった

ら、

事件のにおいを嗅ぎつけて、話に乗ってくるかもしれない。

手始めに、蘭から聞いた住所から、地図で場所を特定みると、
蘭と初めてあったのは公園から、少し離れたところに工藤邸がある
事が分かった。

そこまで分ければ、後は、工藤邸に向かうだけ。しかし、その前に
蘭に報告しておいたほうがいいだろう。
とりあえず、蘭の所に向かった。

「蘭！」

「俊一？」

「そうだ。工藤新一の家が分かったから、今度行ってみる。もうすぐ
ぐ逢えると思う。」

「本当！！？」

その時の蘭の顔はものすごく嬉しそうで、幸せそうだった。
いま、その瞳には何も映っていないと言うのが不思議である。

「ありがとう、俊一！」

「それは工藤新一に逢えてから言えよ。」

そう、本当に、今満足するべきじゃなかった。
こんなことになるとは思わなかったんだ……

工藤邸前。体に力が入ってしまった。

新聞の記事などから、なんとなく育ちが良いことは知っていたが、
やっぱり非の打ち所がない男。金持ちなのだろう。家がデカイ。

入るのにはスゴく勇気が要りそうだが、ここで立ち止まっていたでは
前に進めない。

恐る恐るインターホンをおした。

『はい。』

「すみません。依頼があつて……工藤探偵いらっしゃいますか？」

女性の声。工藤新一は、蘭が死んだばかりだったのに他の女とい
るのか？

その時、がちゃっと音がした。

「こんにちは。」

「え、あ、こんにちは。」

まさか急に出てくるとは思わなかったので、どもってしまった。

女性は、蘭とは違うタイプの美人。

髪は赤みがかった茶髪で、優しくウェーブがかかっている。

工藤新一の周りは美人が多いらしい。

「ごめんなさい。いま、工藤君スランプ中なの。依頼は私が聞いて彼に伝えておくわ。」

事務的な口調の対応だ。

「貴方のお名前は？」

「えと・・・田上俊一です。あの、貴方は？」

「宮野志保。工藤君の助手よ。」

何だ助手か・・・何故か少しがっかりした。蘭には悪いけど。

「わかりました。あの・・・・・・・・・・」

「はい？」

言っで良いのか迷った。もし蘭の死を知っているのなら尚更。

でも、工藤新一に伝えてくれると言っているし、ここで言わなかったらまたここに来ることになる。

それは御免だ。

「あの、蘭って人が、工藤探偵に逢いたいって言ってるんですけど」

その瞬間だった。一瞬、女性の顔が青ざめた。

体調が悪そうって言うより、スゴくあせっている感じだった。

「帰って・・・」

「え？」

「帰りなさい・・・」

命令口調に驚いたが、その眼の威圧がづらい。

「・・・わかりました。帰ります。」

そう言うしかなかった。

2、探され人（後書き）

倅「新一殆どでなかったね。」

蘭「倅希・・・遠回しに私のこと方向音痴って言うてるでしょ・・・」

倅「・・・あははは」

俊「俺って・・・不幸な役だな。」

3、盲目の気持ち

はぁ・・・思わずまた溜息が漏れる。
つくづく自分は苦勞人だ。

家の場所が分かって、今日中には蘭にあってもらうつ予定だったのに、まさかあそこのあの女性に追い払われるとは思わなかった。

やはり、あの女性は蘭の死を知っていたのだろう。
知り合いが友達って言うところなんだろうが、
何にしろ、あの青ざめよう。

蘭の死を思い出させてしまったのかもしれない。
そうだとしたら悪かったな・・・と小さく反省した。

工藤新一は、何とも思っていないのだろうか？
しかし、スランプ中だとも言っていたし、
何も思っていないと言うことは無いだろうが・・・

とにかく、蘭と所に向かうべきだ。

「蘭！」

「俊一！」

俊一という呼び方。
自分は蘭と呼び捨てするから、蘭も俊一と呼び捨てしていい。そう
言っと、すぐそうしてくれた。

それと合わせて、この間からのタメ口。
始めが敬語だったのだが、変な感じがするとずっと、じゃあ、とタ
メ口に変わった。

きっと、人なつっこい性格なのだろう。
すぐに馴染んだ。

始めは少なかった笑みも少しずつ増えて、きっと、自分を受け入れ
てくれているのだな。と嬉しかった。

本当に・・・この笑みが嬉しかった。悩みの種だとしても。

「ねえ・・・」

「ん？」

「私ね、眼の見えない気持ちだが、初めて分かったわ」

「え？」

「目の前が真っ暗で、真っ暗かどうかも分からなくて、何も見えな
くて、

逢いたいのに、逢って確かめたいのにつて思ってたの。

でもね・・・今は、声を聞いて、その暖かさを確かめるだけで、
良いって思えるの。不思議だね。」

彼女は笑っていった。でも、その笑顔は痛々しい。

眼の見えない人々の気持ちは自分には分からない。だから、全ての
人がこう思うのか、分からない。

ただ、彼女は、無い物ねだりしていない。

「蘭・・・・・・・・」

「何？」

「絶対、絶対合わせてあげるから。待ってて。絶対」

「ごめんね」

そう言って蘭は苦笑した。

「工藤君」

声を掛けると、彼は椅子に座って眠り込んでいた。手に、さっき飲んでいたコーヒーのグラスを握っている。最近寝ていなかったし、椅子に座った瞬間眠ってしまったようだ。きつと、チャイムが鳴る直前に寝てしまったぐらいだろう。グラスの表面から水が滴って、机を濡らしている。

「・・・・・・・・工藤君は、幸せになれるかしら・・・・・・・・」

小さく呟いてみた心の声。
今、私が一番に願うこと・・・

工藤君と私が、元の体に戻り組織を倒すため作戦を練っていることを蘭さんは知らなかった。

工藤君は、巻き込みたくないと言って話すようなことはしなかったし、蘭さんに見つからないように姿を隠していた。

私も、見つからないようにしていたし、蘭さんの所まで行くようなことはしなかった。

だから、蘭さんは、自力であそこに向かったのではない。

奴らに、攫われたのだ……

<center>

</center>

3、盲目の気持ち（後書き）

こんばんは。死ネタですみません。

志保さんは工藤君に傷ついて欲しくなくて、

蘭ちゃんのことを思い出さないように仕向けてます。

すごく志保さんが不憫なので、次回からは志保さんに幸せになっていけるように頑張ります。

俊「で・・・俺は幸せになれないわけ？」

倅「はい。多分」

嘘と想いは裏返して

4、嘘と想いは裏返して

.....

「いいか、宮野。奴らの日本のアジトの位置は確認したよな」

「ええ。それは良いけど、大きいアジトはもう一つ、アメリカにあるわ。そっちはどうするの」

「それは今、警察に頼んで、FBIに協力を求めてもらうようにした。」

FBIの連中も、これだけ大きい組織だ。目を付けているはずだし、アジトを知っているのなれば、食いついてこないはずがない」

「そう・・・」

「それより、お前に頼んだ便箋と封筒はどうした？」

「博士に買ってきてもらったわ。でも、便箋と封筒なんて・・・誰かに手紙でも書くの？」

書くのは良いけど、組織のこと、そして私たちのことはトップシークレットよ」

彼も分かっているはずだ。誰かを巻き込まないために、守る約束。いや、私なんかより、彼は十二分に理解しているはず。

「バーロオ。俺がそんなへまする訳ないだろ。大丈夫、大丈夫だ」

言い聞かせるように、唱えるように言う言葉が、耳に残った。

彼は、自分を疑っている。でも、そうしていかなければ始まらないのだ。

「とにかく、組織に見つからないように、作戦は十分に立てた方が
良いわ」

「おう。そのつもり」

.....

「志保・・・志保」

体が揺らされた。

目を開けると、薄らと工藤君の姿が映る。

「工藤君・・・起きてたの？」

「今起きた。それよりこんなところで寝込んで・・・寝不足だろ？休め
よ」

いつの間にか、椅子に座って寝ていたらしい。

首が痛い。ふと、最近よく眠れなかったことを思い出す。

「あら・・・私ったら寝てたのね・・・大丈夫。貴方よりは寝ているわ」

「そうか？」

「それより、外に出てないでしょうね？」

「出てねーよ。．．大体なんで外に出ちゃいけねーんだ」

「貴方は有名人。分かる？外に出れば、貴方の助言で捕まった人間の仲間、そのほかにも、

その家族や友人、熱狂的なファン．．．貴方を危険にさらす存在がたくさん居るの．．だから！．．」

キツイ口調になっているのに気付いていたが、それを抑えることが出来ない。

「志保．．．お前．．」

「．．．何？」

間を開け、冷静になろうとゆっくり息を吐いた。

「一人でため込めすぎだ」

「え？．．．」

「嘘着いてるだろ？探偵なんだからそれぐらい分かる。何も、教えてくれないし、

どうも俺をこの家に閉じこめてる気がするし．．．何のためかはわかんねーけど．．

ただ、俺の彼女はお前じゃない。そうなんだろ？ずっと気になってたんだ．．．．．

本当は．．．ダレなんだ？ホンモノは．．．．

ため込むな・・・言えよ真実を」

工藤君は気付いていた・・・

気付いていたんだ・・・私が嘘をついていること。

無理してることため込んでいること・・・

もう時効だわ。

「く・・・工藤君・・・・・・・・あの・・・」

その時、ふと、彼は微笑んだ。とても、とても哀しそうに。

「ごめん。志保・・・勝手なこと言って・・・あつつ俺、ちょっと外に出てくるから」

「工藤君?!」

ボタンと玄関のドアが閉まる音がした。

もうすでに外に掛けだしてしまったらしい。

ハア・・・と溜息が漏れる。

当然そのため息は、彼の人に届いて居なかった。

逃げないで。工藤君。

そう願ひ、

ついたままのパソコンの電源を落として

ゆっくり椅子に腰掛けた。

志保が俺の名を呼ぶ声は聞こえていたけど、振り返るわけにはいかなかった。

俺は何を言っていたんだ。

いつも一緒にいてくれる志保。

俺に、いろいろ教えてくれた志保。

仕事を押しつけて、外の危険に俺を晒そうとしなかった志保。

守ってくれていると気付いていた。

優しくしてくれているのだと気付いていた。

知っていたのに・・・

その束縛が鬱陶しく思えた。

きつと志保は俺の彼女じゃない。

だけど、俺にその事を教えないようにしている。それは・・・

俺を傷つけないようにしている彼女の優しさだったのに。

どうして俺は、志保に文句ばかり言ってしまったのだろうか？

志保が傷ついていないはずがない・・・！！

空を仰ぐ。

遠く、遠くて、天界にこの手は届かない。

蘭はそこからやってきた。この遠い道をこっちに向かって降りていくとき、何を思っていたのだろうか？

早く逢いたいという、体がついていけないような強い思いだろうか？
逢えると言う幸せな気持ちが心に溢れていたのだろうか？

きっと、それもあるだろうけどそれだけじゃない。

焦り、不安、心細さ・・・そんな気持ちが募っていたのではないだろうか？

降りて初めてあつた人間。

それが自分。

蘭の存在に初めて気付いた人間なのだ。

すなわち、自分だけが、蘭の不安な気持ちを打ち消し、願いを叶えてあげられる。

蘭は、工藤新一に会いたがっている。

蘭の笑顔を見たいから、願いを叶えたい。
だけど、もうあの家には行けない。

きつとあの女性は、工藤新一を外に出さないようにしているのだろ

う。

逢わせてやることはできない。

なら、もうこうするしかない。

蘭に嘘をつくことになるけど、でも、これしかない。

騙してでも、蘭の願いを叶えたい。

いつの間にか、自分の願いになっている。

そう、これは自分の願い。

ちよつと努力すれば、またあの家に行けることを考えないフリして、
蘭の笑顔を見たがっている。

蘭の笑顔と、言葉を、全て自分の元に、自分のモノにしようと思っ
ている……

我が儘。

その言葉は知っている。

でも、

この衝動は止められない。

うつすら気付いていた。

蘭に初めてあった時。工藤新一の家が分かった時。

工藤新一の家から女性が出てきた時。眼のことについて話を聞いた
時。

蘭の顔に、少しずつ笑顔が戻ってきた時・・・

そう、自分は、本当に蘭のことを愛しいと、思っている。

蘭を愛している。

蘭の気持ちが向いていなくても構わない。

蘭を、愛しているんだ・・・・・・・・・・

嘘と想いは裏返して（後書き）

倅「はあ？（上がり調子）」

俊「ダレに対して言ってるんだ？」

倅「君だよ君・・何蘭ちゃんに惚れちゃってんの？」

そりゃ、蘭ちゃんの笑顔は鼻血もんだけどさ・・自分ものにしようなんて甘いね」

俊「そう仕向けたのはお前だ」

新「蘭に何するんだおめー！！」

俊「うわつつつつ！」

倅「後三編ぐらいで終わる予定です。今まで読んで下さった方有り難うございました。

是非最後まで読んで下さい。よろしくお願いします」

5、嘘の準備と心迷子

5、嘘の準備と心迷子

「声をかえる機械？」

「無理か？」

「いや・・・大丈夫だと思うけど・・・何に使った？」

「秘密」

久しぶりの大学。

暫く休んで、蘭の所にいたのだけど、そろそろ行かなくては単位がヤバイ。

と言うことで今日はここまで来た。

しかし本当の理由は、単位などじゃない。

蘭への嘘の準備をするために、ここに来た。

「眼が見えない」そこにつけ込んで、自分は愛しい人にあえて嘘をつく。

苦痛だけど、蘭に笑って欲しいから、嘘をつくのだ。

「まあ、今日中には出来るんじゃないの？ちよつと興味あるし、熱中して出来る

だろうからな。サンプルで誰かの声入れてやろうか？誰が良い？」

「……工藤新一」

「おつ、何？推理ショーでもするのか？」

今自分をちやかしている友人は、機械に強い。

高校の時には、ロボット選手権で相当上まで行ったようで、自慢を長々と聞かさ

れたことがある。

「じゃ、七時頃取りに来いよ」

「ああ。頼む」

作戦の第一段階を突破した。

変声機は、工藤新一の声。

蘭は眼が見えない。

つまり、

自分が工藤新一になりきるのだ。

最近、よくテレビやラジオに出ている彼の口調は知っている。

少し練習すれば、きっと、そのまねをすることが出来るだろう。

そしたら、きっと、蘭は笑ってくれる。

それを夢見て、さつきから虫が騒ぐ腹を満たすため食堂に向かった。

あゝあ・・・

俺はなんてバカなんだろう。

飛び出してきてしまった手前、のんきに家に帰るのはちょっと気まずい。

その考えが頭に浮かんでしまって、結局昨夜は家に帰ることが出来なかった。

しかも、ケイタイも家に置いたままなんて、間抜け過ぎだ。

そんなことを考えながら歩いていると、自然に足を止めていた。

目の前にあるのは、1階に喫茶店、上を見ると、2階に事務所、そして、その上に住宅のある小さなビルだ。

「あれ？」

なんとなく見覚えのあるビル。

でも、思い出せない。

周りは全然思い出せないのだから、少しでも見覚えがあるこのビルには、

もしかしたら記憶を無くす以前、何度か出入りしたことがあるのかもしれない。

ぐう。

ふいに音がして、ビクッと体を震わす。
左右を見回すと、また、間抜けな音がする。

よく聞いていると、それは自分のお腹の音で、
その時初めて、自分は昨夜も、今朝も何も食べていないことに気付いた。

ほんつとに抜けてんな・・

そんなことを考えながら、ふとビルを見る。

目の前にある1階のお店は、喫茶店。迷わず俺は、そこに吸い込まれるように入

っていった。

喫茶店内は空いていて、すぐに席に座ることが出来た。
とりあえずは、財布を持っていることを確認し、メニューを見つめる。

腹の音は未だ鳴っているが、あまり食べる気がしない。

「あ・・・」

「はい？」

声を掛けてきたのは、ウェイトレスで、注文を待たせているからか
と思ったが、
心なしか顔が紅い。

「あの、工藤新一さんですよね？」

「は・・・はい。そうですけど」

「ほ、本物なんだ！」

「ははは・・・」

志保が言っていた。

俺は有名人なんだって・・・

しかし、こんなにすぐに気付かれる物だとは思わなかった。

きゃーと騒いでいるウェイトレスは、今にもケイタイで友達に教えるつもりだ。

「あ、あの、ウェイトレスさん？」

「え、あ、はい！！！」

ウェイトレスの声は明らかに裏返っている。

「コーヒーと卵サンドを下さい」

「はっはい！」

はあ・・・本当に外が危険に思えてきた。

「コーヒーのおかわりは、無料です!」

ニコニコしながらコーヒーと卵サンドを運んできたウェイトレスに、俺は心の中で溜息をついた。

「ありがとございましたっ」という、ウェイトレスの声に押され外に出ると

、強い日差しに思わず目を瞑った。

どうやら、さっきまでいた店内は、淡い明かりしか灯していなかったらしく、

異様に外が眩しい。

そういえば・・

よく考えると、さっきは行った店のウェイトレスは、俺のことを確かめてきた。

そのウェイトレスの浮かれながらもてきぱきとした対応。それは、働き慣れている証拠で、割と前から此处で働いているということだ。

そうすれば、もし、この店に俺がよく通っていたとすると、ウェイトレスが俺の存在を珍しがるのはおかしい。

だとすると、俺はこの店に通っていなかった。
つまり、俺がこのビルでよく出入りしていたのは、この喫茶店以外の所だ。

「どうしようか」

上を眺めながら、考え込むというのはなかなか体制的にキツイ。
首が痛くなりそうだが、じっくり眺めた方が、記憶を取り戻すのも良いだろう

と、

上を眺める。

事務所の大きな窓には、毛利探偵事務所と書いてある。

毛利……？なんとなく聞いたことがあるような気がしなくもない。

だが、普通によくある名前だ。もっと、考えを煮詰めた方が良い。

事務所は、毛利探偵がやっている。

それなら、上の住宅に住んでいるのは、毛利という人物だろう。
探偵業をやっているのなら、俺と知り合いでもおかしくはない。

「訪ねてみるか・・・」

とりあえず、記憶を取り戻すため、その階段を上ることにした。

ピンポン

インターホンを鳴らし、相手が出てくるのを伺うが、誰も出てこない。

ピンポン

もう一度ならずが、誰も出てこない。

ピンポン

出てこない。

ピンポン

いないのか？

ピンポン

今、外に出ているのかもしれない

ピンポン

殺人犯の尾行中かもしれない

ピンポン

しかし、ドアに近寄り、耳を澄ますとテレビの音が聞こえる

ピンポン

外出するなら、テレビぐらい消すだろう。

ピンポン

押すの何回目だろう・・・

ピンポン

出てこない・・・

しょうがない・・

帰ろうかと思い、なんとなく、ドアノブを捻ってみると、ガチャと開いた。

「あれ」

あまりの不用心さに間抜けな声を出してしまう。

「さては、毛利探偵って言うのはすでにボケが末期症状のお爺さんとか・・」

一瞬よぎった心配は、すぐに打ち消された。

窓際に置いてある、事務用のデスクに突っ伏して眠っている男がいた。

男は、どうやら、毛利探偵という人物のようだ。

デスクには、サインペンとメモ紙、電話が無造作に置かれているが、その中に、綺麗な装飾のされた写真立てが、周りのゴミから離れた所に置いてある。

それに手をのばす、その時だった。

急に体が浮かんできたかと思うと、床にバシッとたたきつけられていた。

「不法侵入罪で逮捕するぞ!!!」

上を見上げると、毛利探偵が、怒鳴りながら、こっちを睨み付けている。

「あ、あの、済みません。毛利探偵ですよね？」

「は？なに言ってるんだお前」

毛利探偵は、不審そうな顔をして、こっちを見ている。

「十回ほどインターホンを鳴らしたのですが、出てこられなかった
ので、

勝手に入りました。済みません。ところで、今僕は、記憶を取り戻すため此処に

いるのですが、その写真を見せてもらえますか？」

毛利探偵は答えない。

意味が分からない。と言う顔をして俺を見ている。

「済みません」

俺は、一言謝って、写真を見た。

その写真には、綺麗な黒い髪の美しい女性が映されていた。晴れ着姿で、振り袖がよく似合っている。

そして、なぜか、息苦しい、そして、愛おしい気持ちになる。

さては、写真の女に一目惚れしたか。そんな考えが心に浮かんでは、心の隅に押しやり、自嘲気味に笑いを浮かべてしまう。

心が分からなくなりそうだ。いろんな考えが、頭に浮かんでは消え、自分の心にさえ偽って、考えを無理に心の隅に押しやるうとしている。

心が迷子になってしまったのだろうか？

「この女性は美しいですね。貴方の娘さんですか」

「お前・・・本当に記憶を失っているのか？」

毛利探偵は、こちらを向いて酷く驚いた顔をしている。

どうやら、俺はこの人と交流があったらしい。

「そうです。どうしてもかは知らないけど」

「そうか・・・」

毛利探偵は、それだけを呟き、俺の手から、写真を取った。

「二十歳前に結婚すれば、成人式の着物は、振り袖を着られない。だから、写真館で撮ったんだ。あの時のあいつは、本当に幸せそうだった」

淡々と言う毛利探偵の目からは、涙が溢れていた。

途端に、俺の心に、これ以上聞いてはならないと警告がなる。

「お話有り難うございました。それでは、失礼させていただきます」

くると、背を向けて、ドアに向かうと、毛利探偵はポツリと言った。

「この不幸が、何でお前らだったんだ」

誰に向けたか分らない。

写真の彼女に向けたのかもしれない。

そう、ただポツリと・・・言った。

5、嘘の準備と心迷子（後書き）

もうすぐ、終わる予定です。今まで読んで下さった方、有り難うございました。これからもよろしく願いします。

6、ループ

6、ループ

「どうだ？出来たか？」

七時。

友達に頼んだ変声機の様子を見に来た。

「おう、上出来！」

にこやかに笑う友達の目の前には、
作ったと思われる物が置いてある。

「それ？」

「ああ、お前が言ったように、工藤新一の声をサンプルに入れ
たから」

「使い方は・・・」

「これは超小型マイクなんだ。

マイクにはクリップが付いてるから、それを服に付けて・・・」

先の小さなクリップを、服に付ける。

「そして・・・マイクに付いてるダイヤルを回すと・・・

『物的証拠は拳がつてるんですよ・・・』ってな」

「すげえ・・・」

その声は、まさしく工藤新一の物だった。
自分の感嘆の声に、友達は無言に笑い、
クリップをはずした。

「どうだ？すげえだろ？！」

「あ、ああ！悪いな、こんな良いもの仕上げて貰って」

「チョロいチョロい！面白かったしな」

「さんきゅ」

「どういたしまして・・・金払えよ」

ボソツと呟いた友達の声に苦笑し、後では払うからといって、
大学内を駆け抜けた。

早く、早く、蘭の元へ・・・

「どうすっかなあ・・・」

毛利探偵は、すごく辛そうだったし、

居心地も悪かったしで、
ビルから出てきたは良いが、
分かったことは殆ど皆無だ。

あの女の人の名前だけでも聞いておけば良かったと思ったが、
あの状態で聞く訳にもいかなかった。

「収穫ねえし・・・疲れたし」

疲れた。今の状況を表すのにぴったりの言葉だ。

今まで意地を張って帰らなかったが、

ここ最近、運動をしなかったのと、寝てなかったのてくたくたなのだ。

帰りたい。

自惚れでなければ、志保も心配しているだろう。

とりあえず、見覚えのない街とはいえ自分の家ぐらいは分かる。

「帰ろう・・・」

オレは、つかれた体を引きずりながら歩き出した。

家に帰るべく・・・

七時までの間

家で工藤新一になりすます練習をしていた。

工藤邸訪問が偶々収録されていたラジオ番組を録音して何度も繰り返し聞いて、

口調から、口癖、息継ぎまで完璧に。

また、自分の声を録音し、

本物の工藤新一と、自分の声を交互に聞いて、練習したりもした。

完璧になるため。

蘭の笑顔を見るために……………

数時間練習し、やっと自分は、工藤新一の口調になれ、普通にしゃべれるようになった。

初めのうちは何か恥ずかしい気持ちもしていたが、そんなの事言っていられない。と、練習していると、自然に板に付いてきた。

完璧だ。そう思って、大学に向かえば、友達の方も完璧に仕上げていてくれた。

これで、全てがうまくいく。

全てが……………

もうすぐ、蘭の居る公園が見える。

後少しだ。蘭の、自分の、願いが叶うまで……………

「足痛てえ……………」

くたくたの体で、のろのろ歩きながら、ぼそりと呟く。
まるでそれは、太った中年の男性のセリフの様だが、

周りには、誰もいないし、聞いた人なんていないだろう。

「足が動かねえ・・・」

重く鉛のような足は、ずるずると引つ張るのも苦痛だ。

明らかな運動不足。

これで太ってないのは、食事もなくに取っていないからだろう。

その途端、ふと、頭に会話がよぎった。

『忙しいのは分かるけど、ちゃんと食べてんの？特に朝ご飯は大事なのよ』

『食ってるって・・・朝は、ご飯にみそ汁に焼き魚だろ・・・あと・・・』

『

『へえ、意外にちゃんと食べてるのね。しかも、家の朝ご飯とそっくり。』

でも、前は、いつもトーストじゃなかったっけ？』

『えつつつ！え、あああ・・・そ、そうなんだ。たまには良いかなあつてー！』

『ふん・・・まあ、良いんじゃない？トーストより栄養があるし・・・』

『う、うんうん！じゃあな、また電話すつから！』

『えつつちよつと待ってよ』

『なんだよ?』

『早く帰ってきなさいよ・・・待ってるんだから・・・』

『へいへい、空手のお姫様のために、火の中水の中走って帰ってきますよ』

『もうっバカ』

『じゃあな』

『うん』

誰だ・・誰なんだ。
オレを、待っていると言った人・・・
誰なんだ。

思い出そうとすると、酷い頭痛がする。
まるで、結末を見るのを拒むかのように・・

「帰ろう・・」

まず、帰ろう・・

体中が、此処に止まることを拒否する。

家に、急いで帰らないと、

何かが、起こりそうだ・・

そう思った時だった。

数十メートル先にある公園から、

なにかの叫び声が聞こえた気がした。

事件か？

そう思うと、もう、体が言うことを聞かない。

オレは、くたくただったはずの体を

フルに動かして、

公園まで走った。

「蘭！！！」

「俊一？」

いつもの公園。

ガラリとしている中、

蘭はブランコで揺れていた。

きつと、はたから見れば、

ブランコだけがゆらゆらしている状態なのだろうから、

少し怖いモノがある。

「なあ蘭」

「どうしたの？俊一」

自分の改まった態度に異変を感じたのか、
蘭は軽く羽ばたくと、ブランコから降りた。

「今、此处に、工藤探偵を連れてきたんだ」

「えー!!」

蘭は、見えない眼で当たりを見渡した。

しかし、見えるはずもなく蘭はしゅんとした。
不謹慎だが、その様子が可愛らしく、
思わず微笑んでしまう。

「今、横にいるんだ・・・」

そう言って、自分は、マイクを服に付けた。

「蘭・・・・・・・・・・」

出来る限り、愛おしそうに、心を込めて、名を呼んだ。

「新・・・・・・・・・・」

蘭が呟いた。

でも、

その呟きは、

懐かしい想いを表した呟きでも、

愛しさを込めた呟きでもなく、

疑いの呟きだった。

「オレだよ！蘭！逢いたかった……」

愛しさを込めて、叫ぶ。

しかし、蘭は、ゆっくり首を振った。

「違うよ……新一じゃない……アナタは……誰？」

「何言ってるんだよ、蘭！オレは！」

「アナタは……誰……？」

蘭が言う。

自分の声も打ち消して。

どうして、蘭は気付いたんだろう。

「俊一……誰……？」

蘭が呟いた。

これは、自分のことを信じている。

そう言う意味なのだろうか。

「ごめん……蘭」

マイクをはずし、

そう呟いて、

蘭の元から離れ駆けだした。

どうして、蘭は気付いたんだろう。

自分にどこか落ち度があったのだろうか。

いや、無かった。

ただ一つの誤算は、
蘭が、工藤探偵を、愛していた。
それだけだった。

「俊一？・・・俊一！！」

蘭が叫ぶ。

きつと、駆けだした足音に気付いたんだろう。

その声を聞いた途端、
走る足を止めた。

公園の外に駆け出すことが出来なかったことに
情けなさを感じながら、

公園内の端の方にある、
林の後ろの辺りに隠れて、
蘭を見た。

蘭は、
うつすらと涙を目にため、
ゆっくりと羽ばたくと、
軽く飛んだ。

白い白い羽が落ちる。

その時だった。
足音が聞こえた。
だんだん近くなる。

外から来た人に、
蘭は見えないけど、

自分の姿は見える。

そう思い当たり、
草むらにかがみ身を隠した。
足音の主の顔は見えないが、
どうやら若い男のようだ。

「誰もいねえじゃねーか・・・」

耳に入った、呟く男の声。
それは・・・

「工藤・・・探偵・・・？」

思わず、ぼろつと口から出た言葉に、
自分で驚き、口をふさいだ。
どうやら、周りには聞こえていなかったようだ。

どうしようか迷ったが、
とりあえず周りから姿が見えないように、
蘭と工藤探偵を見た。

その瞬間。
蘭が叫んだ。

「新一！！！！」

工藤探偵の声を聞いて、
降りてきたのだ。

「あ・・・・・・・・」

工藤探偵も、蘭の存在に気付いたようで、
目を見開く。

「天・・・・使・・・・？」

驚いた・・・・

工藤探偵は、蘭のことを知らないのか？

・・・・・・・・前々から、気にはなっていた。

スランプ中だといって出てこなかった工藤探偵。

あの女性の、蘭のことを言った時の焦りの表情。

あの女性は、工藤探偵を守っていた？

工藤探偵が苦しまないように？

ということは・・・・

もし、

これは、もしの話だけれど、

工藤探偵は、記憶を、失っている・・・・・・・・？

「新一・・・・・・・・」

蘭が呟いた。

「とうとう・・・天使なんかまで見えるようになったか？俺・・・」

「新・・・」

酷く頭痛がする。

俺はこの女性を知っている。毛利探偵の娘さんだ。

そして、思い出せなければならない。

この女性のため、自分のため・・・俺とどう関わっていたかを
どうして思い出せないんだ！

現実から眼を背きたい。強い願望に駆られ、目を瞑る。

その瞬間、瞼の裏に写る、映像・・・

今、目の前にいる、女性。名前は・・・そう、蘭。綺麗な花の名
前・・・

「新一・・・」

蘭が微笑んでいる、その眼には、雫が溜まっている・・・思い出した・・・

この人は、俺が一番愛した人・・・

そして・・・誰かに殺された人

「逢いに来たよ・・・新一」

「もう一度・・・もう一度、逢えるなんて・・・蘭」

愛しい愛しい名前。

呟くと幸せな気持ちになる。

それと同時に、置いていったことを思い出す。

俺は蘭に、一体最後に何をしてやれた？・・・愛しい人に何をしてあげた？

ぐっと思ひ出す。そして、少しだけ思い出した。

俺は蘭に手紙を書いたんだ。

何を書いた？・・・そうだ・・・大丈夫。すぐ戻ると書いた。

蘭は、その手紙を読んだのか？

「手紙、手紙を読んだのか?!」

「うん。ありがとう・・・」

ちゃんと蘭の手に渡っておいて、どうして蘭は殺される様なことになったのだろう？

己の無力さを知り、ぐつと唇をかんだ。

還る記憶。待つてた蘭。ずっと待つてた蘭。俺を待つてた蘭。

そして、これだけは、薄らと記憶にある、確かな事実。

蘭が命を落としたのは、蘭が切ない思いをしているのは、
全て・・・全て、俺のせいだ。

「新一・・・私、新一に出逢えて本当に良かった。

あのね、天使になると、生前の記憶が少しずつ消えてきて、
今はもう、少ししか記憶が残ってないんだ・・・

それでね、今残っている記憶って、何だと思う？」

蘭の眼から、雫が浮かび流れている。

その雫は、月明かりに照らされて、キラキラと輝いていている。
本当に綺麗だ・・・

「今ある全ての記憶がね、新一と過ごした日や、新一の事考えてる
時のこと

なんだよ・・・

すごく小さい頃の話から、つい先日のことまで、

新一が居なくなった日も、新一が戻ってきて、また暫く逢えなくな
るといった日・・・

その日、プロポーズしてくれたことも・・・」

少しずつ、記憶が俺の中に戻っていく。

まるでエンディングロールのように流れ行くそのほとんどが、蘭
と共にいる記憶。

元に戻ることに成功して、やっと抱きしめることが出来た蘭との記憶。

「ねえ、新一？新一が、記憶を無くした理由。思い出した？」

「え？いや、まだだけど」

「ごめんね。全て、私のせいなの・・・新一が、傷ついて、悲しんだ全てが、私のせいなの・・・」

え・・・・・・・・？

蘭は、涙を眼にため、ゆつくりと話す。

「新一は優しいから、組織を潰して、急いで戻ってきて、私がいなかったから、まさかとおもって、アジトに戻って探し回って、私を見つけた時、びっくりしちゃったんだよね。そして、悲しんだ・・・」

「蘭・・・？なに言ってるんだ？」

「私、新一を悲しませた。そして、私自身も哀しいと思ったからこそ来たの

そう、全ての決着を付けるために

新一が全てを思い出して、元の生活に戻れるように・・・」

「蘭？」

「新一は、忘れちゃったんだね。私の他に知っているのは、多分、組織のあの人と、志保さんだけ・・・」

「蘭！どうしたんだよ?!」

頭がズキズキする。これを思い出すことを拒んでいる。

「新一・・・ごめんね。全ては私のせいなの。」

貴方の大丈夫の一言を信じられずに、手紙にわざわざ書いて送ってくるなんて、

とても大変なことになってるって思ってしまったたら、

その後、眠れなくておかしくなっちゃったのかなあ・・・そんな時に、奴らにあったの。

工藤新一に逢わせてやるって・・・私は、何の迷いもなく、奴らについて行っちゃって・・・

何も考えなかった私が悪いの。新一はなにも悪くない。だから、ね・・・」

蘭の涙が、落ちた。その時だった。

「工藤君・・・本当のことを言うわ。だから、貴方も逃げないで」

志保が、其処に立っていた。

「工藤君、思い出して。アジトを探し回り、

貴方が見たのは、鈍器で殴られて気絶している蘭さん。

貴方は、それを見て、死んでいるのだと勘違いし、正気を失ったわ。そこに、まだ生きていた、あのジンが、貴方に向けて、銃を構えたのよ」

全てが、急速に回り出す。

.....

蘭を見て、狂った俺。どうしようもなく叫んで、叫んで、声は枯れた。

蘭！蘭！と、揺さぶっても、頭から血を流した蘭は、動かない。

その時、視界に映ったジン。傷だらけのヤツは、こちらに銃を向ける。

「いいざまだな。工藤、新一・・」

その時、だったんだ。

「ごめんね、最期まで一緒にいてあげられなくて……でも、私は、幸せだったよ……」

蘭が、ポツリ、そう言って、抱きかかえていた俺の手を振り払って、俺に、覆い被さった。

「さよなら、新一……」

全てが……ゆっくりと駆けめぐった。パンツとはじける銃声。

小さく声を上げて、目を閉じた蘭。

血のにおい……

ジンの笑い声。

志保の叫び。

かれた声で蘭と叫んだ俺。

全力で、全てを忘れたいと願った瞬間。

.....

「あのあと、私がジンを撃って、決着がついたわ・・・」

「蘭は・・・俺を庇って、シンダ・・・？」

そうだ、蘭は俺のせいで死んだ。全て、俺のせいなんだ。

「違うの新一！！！」

「蘭？」

「私が勝手に庇ったの。新一は悪くない」

「なんで、俺なんかを庇ったんだよ・・・」

俺の目から、あふれ出す涙。

「新一が・・・大切に・・・大切にたから・・・」

「蘭・・・」

蘭が大切だった。蘭のためなら、きっと命を捨てることも容易かつ

た。

そして、それは、蘭も同じだった？

「新一……いつでも、貴方が生きることを願っているの。私も、志保さんも。だから、全てを捨てても、貴方を守った。どっちにしろ、あのままでは私は助かっていなかった……」

そうか……。ありがとう、蘭……。

「俺も、蘭が大切だった。だから、言わせてくれ。

蘭を、愛してた。誰よりも。ずっと、ずっと……」

嬉しい。

愛しい人が、自分を想って体を張った。

嬉しいけど哀しい。

哀しい……。

「ありがとう」

蘭が微笑んで、涙が頬を伝った。

それも俺は同じで、頬を伝い、下へと落ちた涙は、土にしみこんだ。

「あのね志保さん」

「なに？」

「ありがとう。新一を守ってくれて」

「どう、いたしまして」

志保が微笑んで、蘭を見た。その眼には、涙が伝っている。やっと、彼女の中でも決着がついたのだろう。

「俊一君」

俊一君？誰だ？

「ありがとう。危ない奴らだからなんて嘘ついてごめんね。解決していたの。でも、その事を調べることで、また動き出している、

残党達を刺激しなくなかったから・・・」

「分かってる・・・」

林の後ろあたりの草むらから声がする。

その声は少しかすれていて、涙していることが分かった。

彼は、きつと、蘭の協力者で、また、蘭を想う一人なのだろう。

「新、一・・・」

「蘭?! どうしたんだ?!」

「ごめんね。限界みたい・・・もう、行かなきゃ・・・」

「待てよ蘭!!」

息をのむ。蘭が、行ってしまう!

「新一・・・危険な事件に首をつっこんだりしちゃダメよ・・・
それと、今度は、新一が志保さんを守る番・・・だから、志保さんを、
籠から出してあげてね・・・でも、新一も、・・・籠から出なくちゃ
ダメだからね・・・」

籠?

「籠って何だよ! 蘭!」

「籠・・・一度こもったら、一人で出るのはとても恐いのよ?
誰かと一緒に踏み出さなきゃ、幸せにはなれない・・・だから、
一緒に・・・踏み出して、外の空気はおいしいと、知らなきゃ・・・」

「分かったから、蘭! 行くなよ! 一人はだめだ!」

「新一は・・・志保さんが居るでしょ?」

「そうじゃなくて、おめーだ! また、空に還るのか?! 一人なのに
?!」

「ねえ．．．．．新一．．．．．いつも見てるの。上から、新一のこと．．．．．
だから．．．．．一人じゃないんだよ？．．．心だつて．．．
つだから．．．」

「蘭．．．お前、体が．．．」

「ホントだ．．．限界なんだね．．．ホントに」

蘭の体は、端からゆっくり、じわじわと消え始めている。
もう、止められないのだ．．．
俺は、空に浮いている蘭の手を引いた。
引き寄せられて、驚いている蘭を抱きしめる。

「し、新一？！」

「バーロォー．．．いつも一人で泣いてたおめえが、寂しがらない訳
ねえだろーが」

じわじわ、足から消えていく蘭の顔を見ると、その眼から、みるみ
るうちに涙が
溢れてくる。

「心が、一つなんて、嘘だね。新一
．．．やっぱり、哀しい．．．もう、逢えないの？一人にしない
で．．．また離れるなんて．．．新一い．．．」

虚勢が、崩された。
俺の中、蘭が泣いている。

俺も怖い。蘭を失うこと。そして、失う恐怖に気付いていなかった昨日が、

記憶を失っていた間が・・・

俺一人が、その恐怖から逃げてた？

抱きしめる力が強くなる。

なんで、俺たちなんだ。

なんで、他の人間じゃないんだ。

虚勢を張ってまで、最期は笑顔を見せようと必死になっていた蘭。それでも、壊れた笑顔。

幸せになるはずだった。

そう言うシナリオがあつたはずだった。

幼馴染みで、ずっと一緒にいて、同じ学校に通って、早く結婚して、子供を産んで、幸せな家庭を築く。

そう言う、シナリオが・・・

どうして、俺たちなんだ・・・

どうして、誰も助けしてくれないんだ・・・

「っんで・・・俺たちなんだ・・・」

永遠の命なんてあり得ないと知っている。
でも、どうして・・・

どうして、今なんだ・・・・・・・・・・・・・・・・

「蘭さん、工藤君、よく聞いて」

志保が、声を発している。
通る声が、次第に俺を現実呼び覚ます。

「蘭さん、貴方は亡くなった。その現実が変わらないわ。
だから、今この瞬間からの先を見て」

先………？

「未来よ。過去は変える事はできないけれど、未来は何億万もの可能性を持っている。
そうでしょう？ 工藤君」

その言葉は、ずっと前、俺が志保に言った言葉だ。

あの時、「そんな臭いセリフよくいえるわね」と言っていた志保がその言葉を発した。

「蘭……」

「新一……」

半分消えている蘭は、さっきとは全く違う、優しい表情をしていた。

「あ、愛しちゃってたんだよ！ 新一……逢えない間もずっと」

蘭が、少し怒ったような笑顔で、叫ぶ。体が天に昇りながら薄れる。
でも、その手を離さない。

「ああ・・・俺もだつて！・・・また逢おう・・・」

薄れた蘭に聞こえるように、叫ぶ俺。
手も薄れてきている。

「うん・・・また、必ず、どこかで・・・」

また、少し、蘭は涙を浮かべた。

「じゃあな、蘭・・・」

俺もまた、涙を浮かべる。

「絶対に、また逢おうね・・・」

涙が、落ちた。

「ああ」

蘭はそれだけを言い残し、空に消えた。

蘭の欠片が、ゆっくりと流れていく風に紛れて、流れる。

俺はやはり、心には、何処か穴が開いたような気分だった。

でも、蘭を、未来を、信じているから、

俺は、前に進む・・・

きっと、こうして俺たちは、出逢って離れてをループ状に回り続けるのだろう。

逢えない時間が長い時、

いつも君を想います
時の流れに揺れながら、
君と揺れたあの頃を、
思い出しています

逢えない時間が長いほど、
逢える喜びは大きいから、
ずっとずっと待ち続けます

前に進むことは恐いけど、
それでも、進んで掴んだ光は、
もう絶対に離しません

さよならと言いません
いつか逢える日を夢見て、
静かに眠るのです

いつか逢える日が来たら、
その時は真っ先に、
君の名前を呼びましょう
君が振り向いてくれたら、
その時は笑って、
二人幸せを願いましょう

6、ループ（後書き）

長い間投稿していませんでしたが、
とうとう、次が最終話です。

話しの展開自体はここで終わりですが、
その後の話となっています。

読み返してみれば、しょうもない話しにここまで時間とページを掛けてしまい、

管理人様や、読者様には多大な迷惑をおかけしました。
本当にすみません。

後もう少しだけ、倅希にお付き合い頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0171a/>

盲目の天使

2010年10月12日05時58分発行